

きり いし い 遺 せき  
切 石 遺 跡

2020 年 3 月

藤 井 興 業 株 式 会 社  
長 野 県 飯 田 市 教 育 委 員 会

## 序

私たちが暮らす飯田市は、河川や断層が形成した段丘と、山麓から緩やかに広がる扇状地が見事に調和した風光明媚の地です。この地は古くから交通の結節点として栄え、他地域の影響を受けながらも独自の歴史や文化を育んできました。

古代から現代に至るまで人の営みが続いてきた飯田市には、遺跡が数多く分布しています。なかでも、国から指定を受けた史跡 飯田古墳群や、史跡 恒川官衙遺跡はそれらの代表例です。私たちは、これらの文化財を大切に守り伝えていかなくてはなりませんが、地中に埋蔵されている文化財については、現代に生きる人々の生活との折り合いのなかで、やむをえず壊されるものもでできます。そのため、開発の前に発掘調査を行い、調査結果を遺跡の身代わりとして後世に残す必要があります。

このたび、賤地区的「切石遺跡」において、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。今回の調査では、縄文時代の堅穴建物が2軒見つかり、土器をはじめとする多くの遺物が出土しました。それらは、さまざまな人やモノが往来してきたこの地の特色をよく示すもので、地域の歴史を語るうえで貴重な成果となりました。本書はその調査結果を記録するために作成した報告書です。

この報告書が広く活用され、地域史のページを書き進めるための土台となることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました事業者様をはじめ、本調査・報告書刊行に関係された皆様に、深く感謝申し上げます。

令和2年3月

飯田市教育委員会

教育長 代田 昭久

## 例　　言

- 1 本報告書は、資材置場建設に先立ち実施された飯田市鼎切石4972番地所在の埋蔵文化財包蔵地切石遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は藤井興業株式会社からの委託を受けて、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 調査は平成30年度に発掘調査を実施し、令和元年度（平成31年度）に整理作業及び報告書刊行を行った。
- 4 発掘調査及び整理作業には略号KKI4972を用いた。
- 5 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 「発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編一」に基づき以下の略号を用いた。  
竪穴建物：SI 土坑・貯蔵穴：SK ピット：SP 自然流路：NR
- 6 調査区は、世界測地系による飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、「基準メッシュ」とする。）に基づき設定した。基準メッシュの設定方法については、飯田市教育委員会 2009 「切石遺跡群」に記載されている。
- 7 調査位置は基準メッシュのⅢ LC-74 21-21、21-29に位置する。
- 8 土層観察については、小山正忠・竹原秀雄 2015 「新版 標準土色帖」の表示に基づいて記録した。
- 9 基準点測量は株式会社小林コンサルタントに委託した。
- 10 本書は春日宇光が執筆し、馬場保之が総括した。
- 11 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

# 目 次

## 本文目次

序		第1節 地理的環境	4
例言		(1) 遺跡の位置と範囲	4
目次		(2) 周辺の地形環境	4
第1章 発掘調査の概要	1	第2節 歴史的環境	4
第1節 調査に至る経過	1	第3章 調査の結果	8
第2節 調査体制	1	第1節 層序	8
(1) 現地組織	1	第2節 遺構	8
(2) 事務局	1	(1) 概要	8
(3) 指導・協力	2	(2) 坂穴建物	9
第3節 発掘作業及び整理作業の経過	2	(3) 土坑	11
(1) 発掘作業	2	(4) ピット	14
(2) 整理作業・報告書刊行	2	(5) 流路	14
第4節 調査の方法	3	第3節 遺物	14
(1) 調査区とグリッドの設定	3	(1) 土器	14
(2) 遺構の検出と精査	3	(2) 石器	15
(3) 記録の作成	3	第4章 総括	16
第2章 遺跡の位置と環境	4	引用・参考文献	18
		報告書抄録	39

## 挿 図 目 次

第1図 調査位置図	6	第8図 SI001 土器	19
第2図 調査位置詳細及び周辺遺跡地図	7	第9図 SI002 土器1	20
第3図 基本層序	8	第10図 SI002 土器2	21
第4図 遺構全体図	9	第11図 SI002 土器3・SP006 土器	22
第5図 坂穴建物(SI001)	10	第12図 SI001 石器・SI002 石器1	23
第6図 坂穴建物(SI002)	12	第13図 SI002 石器2	24
第7図 土坑(SK003・SK005) ピット(SP004・SP006・SP007) 流路(NR008)	13		

## 写真図版目次

図版 1	調査区全景	25	図版 5	SI001	出土土器	29
図版 2	竪穴建物 (SI001)	26	図版 6	SI002	出土土器 (1)	30
図版 3	竪穴建物 (SI002)	27	図版 7	SI002	出土土器 (2)	31
図版 4	流路 (NR008) 土坑 (SK005・SP006) 作業風景・調査地現状	28	図版 8	SI002	出土土器 (3) SI001 出土石器 SI002 出土石器	32

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査にいたる経緯

平成29年度に飯田市教育委員会は事業者からの照会により、埋蔵文化財包蔵地 切石遺跡の範囲内で造成を伴う資材置場の開発計画があることを把握した。当該地は調査履歴がなく遺構の有無等の実態が不明であったため、市教委は平成29年5月15日から16日において埋蔵文化財の分布を確認するため試掘調査を行った。当該調査では、開発予定地内の計4か所にトレンチを設定し、重機による掘削を実施した。その結果、1か所で縄文時代の遺構・遺物を検出し、併せて遺構検出面までの深度を把握した。改めて事業者との間で保護のため協議を行ったが、文化財保護法第93条の届出が平成30年4月2日付で提出されたことにより、当該箇所では遺構の存在する深度まで切土が及び、埋蔵文化財が破壊されることが判明した。これを受け、長野県教育委員会と飯田市教育委員会で保護協議を行い、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

発掘作業に係る業務委受託契約については、事業者である藤井興業株式会社 代表取締役 藤井隆繁と飯田市長 牧野光朗の間で平成30年4月24日に締結した。これにより、現地での作業を平成30年5月28日から開始し、同年6月28日に終了した。整理作業は、令和元年5月28日に両者間で整理作業及び報告書刊行業務に係る委受託契約を締結し、同年度中に飯田市考古資料館にて実施した。

なお、平成29年度に実施した当遺跡における試掘調査の詳細は『平成27年度～29年度 市内緊急発掘調査報告書』(飯田市教育委員会 2019年)に報告している。

## 第2節 調査体制

### (1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会	教育長	代田 昭久
調査担当者	羽生 俊郎	春日 宇光	
作業員	伊東 裕子	木下由紀子	関島 修
	中田 恵	福澤 育子	関島真由美
	森藤美知子	森山 律子	竹本 常子
		松本 恵子	三木 美保
		吉川 悅子	宮内真理子
			吉川 豊

### (2) 事務局

飯田市教育委員会

平成30年度

教育次長	三浦 伸一
生涯学習・スポーツ課長	北澤 俊規
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課課長補佐	関島 隆夫

生涯学習・スポーツ課文化財保護係長 下平 博行  
生涯学習・スポーツ課文化財保護係 羽生 俊郎 村山 博則 春日 宇光  
佐々木佑里香 福井 優希 山下 誠一

平成31年度（令和元年度）

教育次長	今村 和男
生涯学習・スポーツ課長	北澤 俊規
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	羽生 俊郎 村山 博則 春日 宇光 佐々木佑里香 福井 優希 山下 誠一

### （3）指導・協力

長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課

## 第3節 発掘作業及び整理作業の経過

### （1）発掘作業

現地での発掘作業は、平成30年5月28日、重機による表土掘削作業から開始した。当初は試掘調査の成果に基づき、黄褐色土（基本層序第IV層）を目標に掘削を進めようとしたものの、それより上層（基本層序第III層）で遺物が顕著に認められたことにより、当初の想定より上位で遺構を検出した。調査現場横にテントを設置し、調査員及び作業員の休憩及び資材の仮置き場とした。6月1日に委託業者による測量作業を行い、調査区に基準点を設置。以降は作業員を動員し、2m×2mの正方形小区画（グリッド）を設定し、遺構掘削、実測図面の作成、写真記録等を進めた。平成30年6月28日に現地における作業をすべて終了した。

### （2）整理作業・報告書刊行

整理作業は平成31年度（令和元年度）の1年間を期間として実施した。作業は飯田市考古資料館で行った。遺構等は実測図を基に第二原図を作成のうえ清書した。出土遺物は洗浄・注記ののち、復元・実測・拓本・清書を行った。これらの作業は当市が雇用した作業員による手作業で実施した。遺物注記は微細なものを除き、すべての出土遺物に対して行った。注記においては今時調査の略号（KKI4972）、出土遺構名・出土年月日等をアルファベット、ローマ数字を用いて記載した。

報告書刊行にあたっては、調査担当者が原稿を執筆し、遺物写真撮影および写真図版の作成を行った。印刷業者の選定を令和2年2月に行い、同3月に本報告書を刊行した。

## 第4節 調査の方法

### (1) 調査区とグリッドの設定

調査範囲については、平成29年度に実施した試掘調査の成果をもとに、造成による切土の影響が埋蔵文化財に及ぶ箇所を対象とした。調査区は1箇所のみで、調査面積は309m<sup>2</sup>である。発掘調査区の区画にあたっては、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財メッシュ図による区画方法（飯田市教育委員会2009）に準拠した。当該方式に基づく調査位置はⅧ LC-74 21-21、同21-29である（第4図）。

基準杭の打設は委託業者により光波測量機を用いて行った。また、標高の析出も同業者に依頼した。基準杭の設置後、上記区画法により、2m×2mの正方形小区画（グリッド）を設定し、平面図作成及び遺物の取り上げ等の位置記録単位として用いた。

### (2) 遺構の検出と精査

発掘作業は重機による表土掘削から開始し、遺構検出後は人力の掘削へ移行した。遺構掘削にあたっては必要に応じて半截し土層堆積状況を記録した。堅穴建物の覆土掘削やその他建物内施設の掘削では四分法を採用した。出土遺物の取り上げは基本的に遺構単位で行い、建物内の土坑やピット等からの遺物はそれぞれ記号を付して別に取り上げた。遺構外遺物についてはグリッド単位で記録した。

### (3) 記録の作成

図化作業は作業員が行った。平面図の作成は委託業者が打設した基準杭を起点とし、グリッドを単位として実施した。土層断面図を含む遺構図面は1/20縮尺を基本とし、必要に応じて1/10縮尺の詳細図面を作成した。写真記録は調査員が撮影を行った。35mmモノクロ・リバーサルフィルムとカラー・ネガフィルムを併用し、補助記録としてデジタルカメラを使用した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### (1) 遺跡の位置と範囲 (第1図・第2図)

切石遺跡は長野県飯田市賀切石地籍に位置する。賀地区は天竜川に西から流れ込む支流・松川の右岸域を中心とする地域である。当地区には松川が開削した河岸段丘が数段にわたっており、その中位程度に位置する段丘面の山麓寄り一帯、中央自動車道が通過する周辺が切石地籍である。現在、遺跡の範囲は段丘面に沿って東西約1.5kmに広がるが、当遺跡の範囲と名称は遺跡地図の見直し等により数次にわたり変更されている。調査地付近は、昭和40年代の中央道建設に先立つ調査時には「天白A遺跡」であり、中央道付近の「天伯B遺跡」と「山岸遺跡」に分かれて隣接していた。その後、周辺の遺跡を含めて「切石遺跡群」として一括された後、再び「切石遺跡」として独立して現在に至る。今次調査地は中央道北側の段丘内側に位置し、南側の「樋の沢遺跡」と小河川を挟んで隣接する。

#### (2) 周辺の地形環境

飯田市は長野県南部に位置する。当市は標高3000メートル級の山々が連なる木曽山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地南部の主要都市である。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼ばれており、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流するため、諏訪湖方面に向けて開けた環境にある。この天竜川に沿って国道151号(伊那街道)が北へ通じ、上伊那・諏訪方面と連絡する。一方、盆地の南部には高峰が少ないものの、奥深い山地が連続し、天竜川は川幅を狭めて急峻な崖をつくりながら太平洋へ向かう。この起伏の合間を縫うように主要な交通路が各地へ伸びており、南は天竜川と国道152号(秋葉街道)・国道151号(遠州街道)・国道153号(三州街道)によって静岡県西部・愛知県東部、西は中央高速自動車道、国道256号(清内路街道)によって木曽谷および岐阜県東部にそれぞれ通じている。

伊那盆地の景観として特徴的なものに、天竜川やその支流が形成した河岸段丘、及び断層が形成した断層崖がある。特に天竜川右岸においては念通寺断層が長大な断層崖を形成している。この断層による高低差の激しい段差が自然の境界をなしており、一般にそれぞれ山麓寄りの高い側を「上段(うわだん)」、天竜川寄りの低い側を「下段(しただん)」と呼称している。このほか、山麓部から天竜川に向かって広がる扇状地を天竜川の支流が分断することで生じた「田切」と呼ばれる地形もみられ、上・下の段とあわせて現在の行政区画における主要な境界となっている。堆積環境としては、上段においては赤土の名で知られる火山起源の粘土層が堆積し、その下には木曽山脈方面から土石流等により運搬されてきた花崗岩礫が占める。一方、氾濫原が広がる下段では赤土はほとんどみられず、天竜川に由来する砂礫層が基盤となる。

### 第2節 歴史的環境

飯田市内では旧石器時代から人類の痕跡が認められる。特に、山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡は後期旧石器時代の初頭頃とされ、日本列島最古級の遺跡として著名である。

縄文時代では、座光寺地区の美女遺跡等で草創期の土器の出土例がある。早期になると、同遺跡において集落が確認されている。中期に入ると爆発的に集落が増加し、段丘面から中山間地域に至るまで大規模集落が営まれるようになる。特に中期後葉は当地域がもっとも隆盛を極めた段階といってよい。しかし、後期から晩期にかけては遺跡数が極端に減少し、段丘崖下の湿地付近や河川に面した低位段丘上などに、遺跡の立地が変化する。鼎地区の状況を概観すると、松川にもっとも近い低位段丘上には顕著な縄文集落は確認されていない。中・上位の段丘上には、前期の遺構が確認された田井座遺跡、中期には当遺跡や上山遺跡（旧・柳添遺跡）で集落が発達し、後・晩期は当遺跡や猿小場遺跡で活動の痕跡がある。このうち集落の様相が最も判明しているのは当遺跡といえ、中期中葉から後葉にかけて繁栄した大規模集落のひとつとして位置づけられる。

弥生時代には、中期に水田稲作に適した湿地河川に近い低位段丘上に集落が営まれるのに対し、後期になると集落が中位段丘から高所の山麓部にまで集落が広がる。この時期においては中位段丘以下に立地する集落と比較して、山麓部の集落は長期的に継続しないことが多く、社会構造や生活様式の変化が看取される。鼎地区の該期の集落・墓域として、当遺跡のほか、上段の田井座遺跡、一色遺跡などがある。

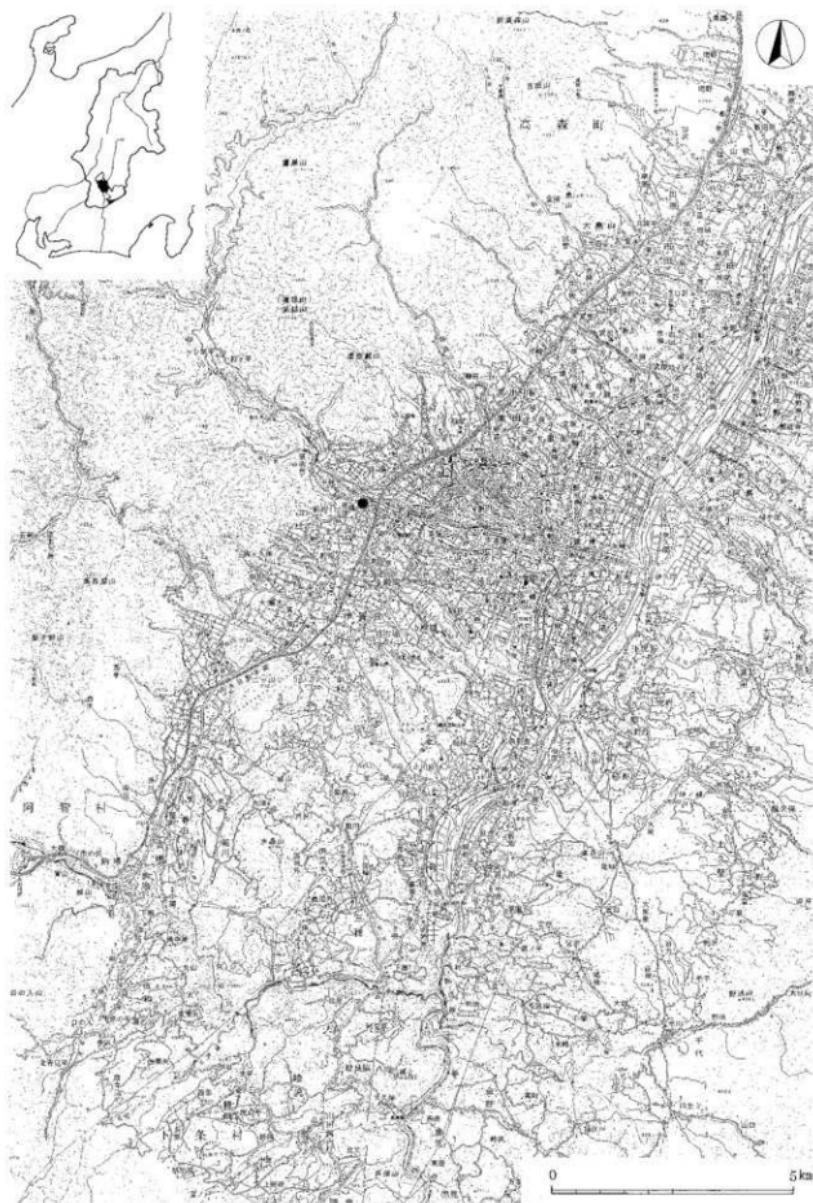
古墳時代中期から後期にかけて、市内の座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路地区を中心に多数の古墳が築造され、近年は「飯田古墳群」として包括的にとらえられるようになっている。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。これらから、大陸から導入された馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定されており、当時のヤマト王権の政策を顕著に伝えるものとして、前方後円墳11基と帆立貝形古墳2基が、飯田古墳群として国史跡に指定されている。鼎地区では当遺跡の中央道地点が大規模な集落として知られる。また、松川に隣接する低位段丘上の鼎中平遺跡（調査地は旧称・黒河内遺跡）にも集落が進出する。古墳は鼎地区内で14基存在したとされ、今次調査区に隣接する天伯神社付近でも円墳2基からなる切石天伯古墳群が調査されている。また、段丘端部の調査においても、古墳時代の土坑墓が確認されるなど、中央道付近に展開した集落とその墓域が判明している。また、近年の調査によって、当遺跡を眼下に見下ろす段丘端部に築かれた笛吹古墳群中の1基、笛吹2号墳が古墳時代前期の前方後方墳であることが判明した。その立地から、当遺跡を含めた段丘崖下の古墳時代集落との関連も考えられ、集落と墓域との関係を考えるうえで示唆に富む。

奈良時代に律令制が導入されると当地域は東山道信濃国伊那郡に編入され、現在の座光寺地区に郡衙が設置された。同地区の恒川遺跡群では、7世紀後半から10世紀にかけて、正倉院や祭祀遺構などが確認されており、恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている。

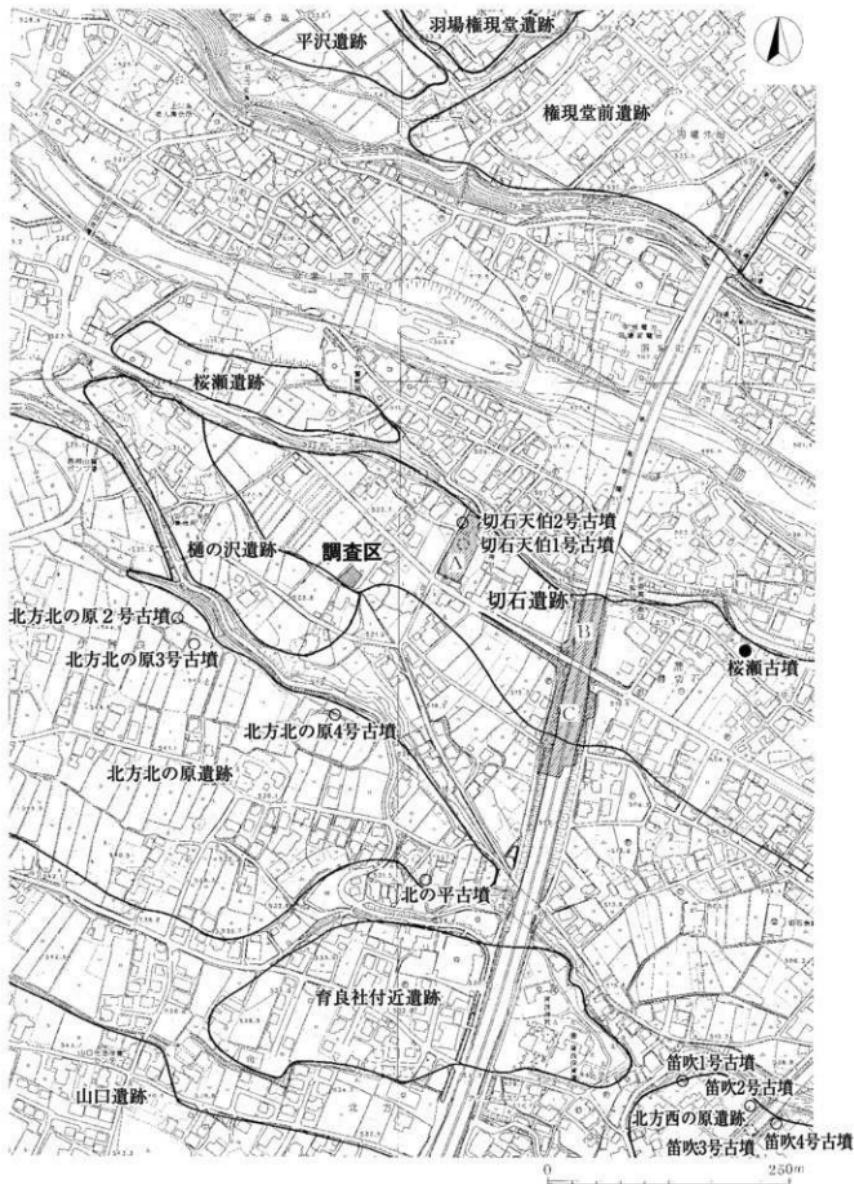
平安時代になると、上山遺跡や猿小場遺跡などで集落の調査事例がある。特に猿小場遺跡では25軒もの堅穴建物群が確認され、当地区的開発の歴史を語るうえで重要な資料を提供している。

中世の鼎地域は伊賀良庄に属し、北条時政が地頭職であったが、その後は一族の江馬北条氏に受け継がれていく。鎌倉幕府滅亡後は坂西氏の所領となつたのちに小笠原氏の支配下におかれ。室町～戦国期にかけて小笠原氏は深志・松尾・鈴岡の三家に分かれて勢力争いを展開した。当地区には中世山城として木曾山脈の前山の頂部に切石城城跡があるが、築造時期や城主等まったく不明である。ほかに猿小場遺跡、田井座遺跡、一色遺跡などで中世の堅穴建物群や溝、小穴群が調査され、集落や居館の存在も推定される。

天文23年（1554）、武田氏の侵攻により伊那谷の領主はこれに服属する。その後、武田氏を追討した織田氏から徳川・豊臣氏などによる支配を経て、近世になると幕藩体制のもとで飯田藩の所領となり、最後は堀氏の統治を経て明治に至った。



第1図 調査位置図



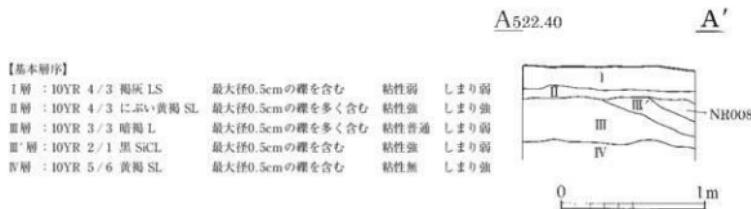
A 昭和49年度調査地(天伯A遺跡) B 昭和49年度調査地(天伯B遺跡) C 昭和45・49年度調査地(山岸遺跡)

第2図 調査位置詳細及び周辺遺跡地図

## 第3章 調査の結果

### 第1節 層序（第3図）

基本的な層序は、調査区北壁のA-A'で観察した。調査区を縦断する大規模な流路（NR008）とそれに伴う堆積が特徴的であるため、流路の境界付近を選定した。地表側からI層～IV層に分かれる。I層・II層は水田の耕土と床土である。III層以下が旧来の堆積土であり、この層から下をNR008が侵食する。III'層はNR008とIII層の境目の黒色土層で、III層がNR008の影響で変色したものと判断した。IV層は黄褐色を呈する小礫混じりの地山層である。したがって、流路がない箇所についてはI、II、III、IVという順序で堆積する。遺構検出は試掘調査の結果から当初IV層上面を想定していたものの、III層の上面で遺物の出土が顕著な箇所が認められたことにより、竪穴建物（SI001・002）を把握した。ただし、III層付近で遺構のプラン全体を平面的に把握することは困難であり、適宜トレンチを設定することで検出を進めた。一部の土坑、ピット等についてはIV層上面まで掘り下げた段階で検出した。



第3図 基本層序

### 第2節 遺構

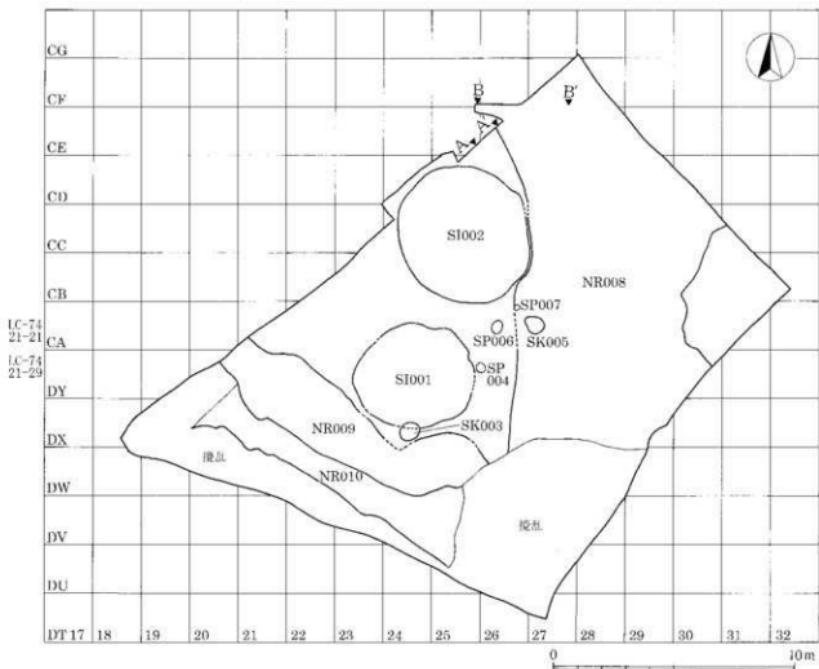
#### （1）概要（第4図）

調査の結果、検出した遺構等は以下のとおりである。

- 竪穴建物…………… 2棟（SI001、SI002）
- 土坑…………… 2基（SK003、SK005）
- ピット…………… 3基（SP004、SP006、SP007）
- 流路…………… 3本（NR008、NR009、NR010）

このうち竪穴建物2棟は繩文時代中期後葉に、SP006は中期中葉に位置づけられる。当調査区における大きな特徴である流路NR008はSI002の隅をわずかに侵食する。SK005、SP007はNR008の下に残存していた遺構である。調査区の南から南東隅は擾乱を受けていた。

本報告中における繩文時代中期後葉の土器及び編年観については吉川金利の論考（吉川 2003・2008）を基礎とし、これをもとに坂井勇雄が加筆修正した年代区分案（坂井 2013）に準拠する。



第4図 遺構全体図

## (2) 竪穴建物

### ① SI001 (第5図、写真図版2)

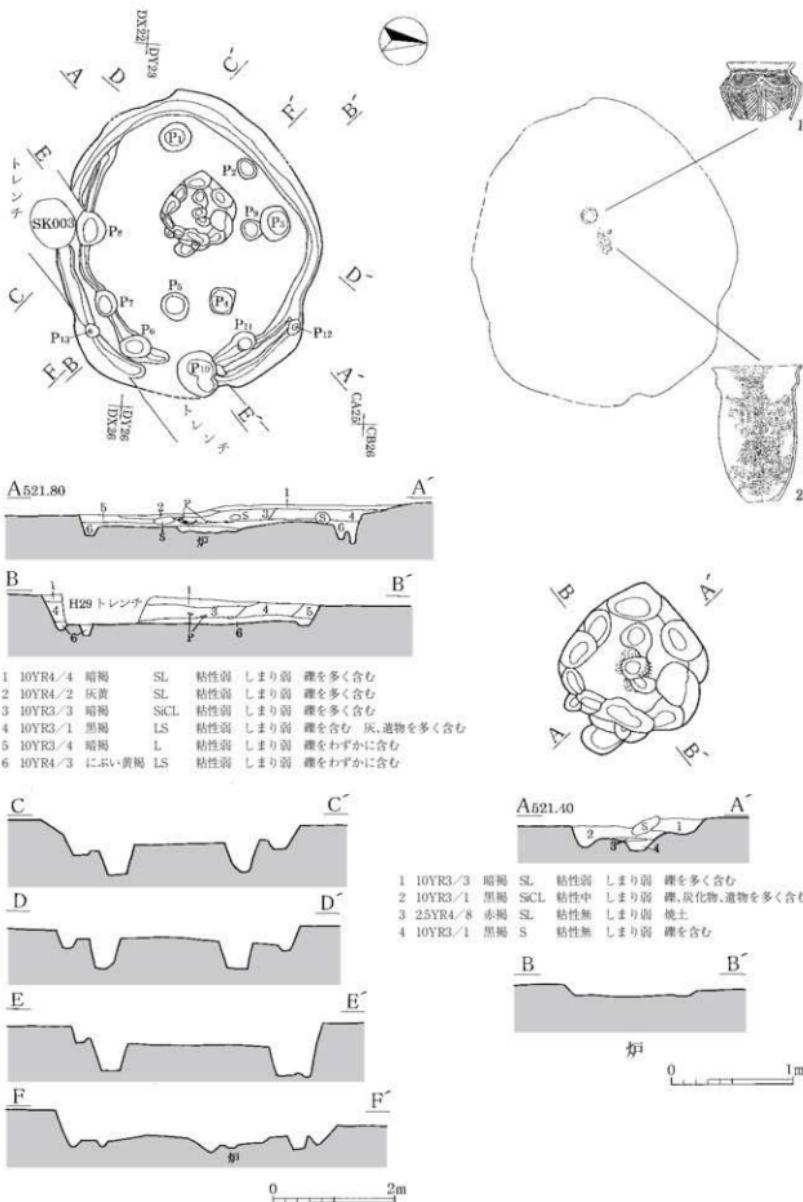
**概観：**縄文時代中期後葉の竪穴建物である。調査区グリッドDY24を中心に位置し、SK003と重複するが、先後関係は不明。試掘時のトレンチによって南東側が削られている。検出面から床面までの深さは40cm程度であった。平面形は不整形に見えるが、北壁付近の平面検出状況がやや不明瞭であったことも加味すれば、本来は概ね梢円形を呈すると思われる。主軸方向はN88°Wを示し、規模は長径5.0m、短径4.3mを測る。周溝は2重に巡る。外側（周溝2）は入口付近を除いてほぼ全周するが、内側（周溝1）は狭小で全周せず、南半分から北東側の一部にかけて確認できる。内側の周溝と重複する柱穴（P6・P8・P10等）があることから拡張もしくは建て替えが行われた可能性がある。

**覆土：**5層からなる。堆積状況から自然埋没とみられる。遺物は全層に包含されるが、建物中央付近に堆積する4層に最も多く含まれる。

**床・壁：**床はほとんど縮りがなく不明確。壁は周溝からやや緩やかに立ち上がる。

**柱穴：**P1・2・3・4・5・6・7・8・10が主柱穴の可能性がある。

**炉：**主軸方向奥寄りに位置する。炉縁石は原位置をとどめるものはなかったが、直径10~20cm程度の小ピットが円形に連続しており、炉縁石を抜き取った跡とみられる。炉内には焼土の堆積が認められ、



第5図 SI001

中央には円形に被熱赤変している箇所があり、炉の芯部と思われる。炉の深さは床から10cm程度である。

遺物出土状況：覆土、周溝、建物内ピットから土器、石器が出土した。建物中央付近の4層下面で土器（1・2）が出土。遺物は埋没過程で遺棄されたものとみられる。

② SK002（第6図、写真図版3）

概観：縄文時代中期後葉の竪穴建物である。グリッドCC25を中心に位置し、NR008に東壁の上部をわずかに侵食される。検出面から床面までの深さは40cm程度であった。平面形は梢円形を呈する。主軸方向はN40°Wを示し、規模は長径5.8m、短径5.4mを測る。周溝は2条あり、内側（周溝1）は外側（周溝2）より浅い。また、周溝2は入口部分を除いて全周するが、周溝1は南側で途切れる。周溝1と重複するピット（P11、P17等）があることから、拡張もしくは建て替えが行われた可能性がある。

覆土：7層からなる。堆積状況からみて自然埋没と思われる。壁際を除き、2層とした黒褐色砂質土が覆土の大半を占める。遺物は全層から出土し、特に2層下部や床上で多く出土したが、2層上部の掘削中にも遺物が顕著に認められた。

床・壁：床面（7層上面）はやや硬化していることで把握した。壁の立ち上がりは垂直に近い。

柱穴：P3・4・5・6・7・8・10・12・13・15・16・17・20が主柱穴の可能性がある。2つの周溝との位置関係から内寄り（P2・3・7・12・15・16）と外寄り（P4・5・6・8・13・17・20）に分けられる。内側の周溝に重なる柱穴（P17・P19・P20）がある。埋設土器が出土したP18は周溝1とP17を切っており、P17は周溝1をわずかに切ることから、周溝1→P17（柱穴）→P18（埋設土器遺構）の順序が想定できる。

炉：床面の中央からや北西寄りに位置する石圓炉である。石の抜き取りや移動は認められず、原位置をとどめる。炉縁石の内縁で80cm×50cm程度の長方形を呈する。炉内は床から20cm程度掘り込まれる。7個の大石を配置し、数個の小石で間を埋めることで構築されている。長辺はほぼ同程度の大きさの縱長扁平な石材を選定し、各2石ずつ配置する。石材は多くが花崗岩で、被熱によるものか風化が著しい。炉の内部は全体が被熱し、焼土が堆積する。

遺物出土状況：覆土の全層から多量に土器・石器が出土している。特に2層出土の土器片は20数個体分に及ぶ。炉内出土土器（15）、2層下部出土土器（9）がある。遺物は埋没過程で遺棄されたとみられる。

埋設土器遺構：建物内でP1、P18の2基の埋設土器遺構を確認した。P1は柱穴P15、P18は柱穴P17及び周溝1の掘り方をそれぞれ切る形で重複する。埋設土器（11、12）は双方とも正位で据えられていた。

土器内堆積土は14に地山質の土が混じる以外は建物覆土と大差なく、埋没過程で流入した可能性がある。

その他施設：貯蔵穴と思われる断面袋状の土坑（P2・11）がある。

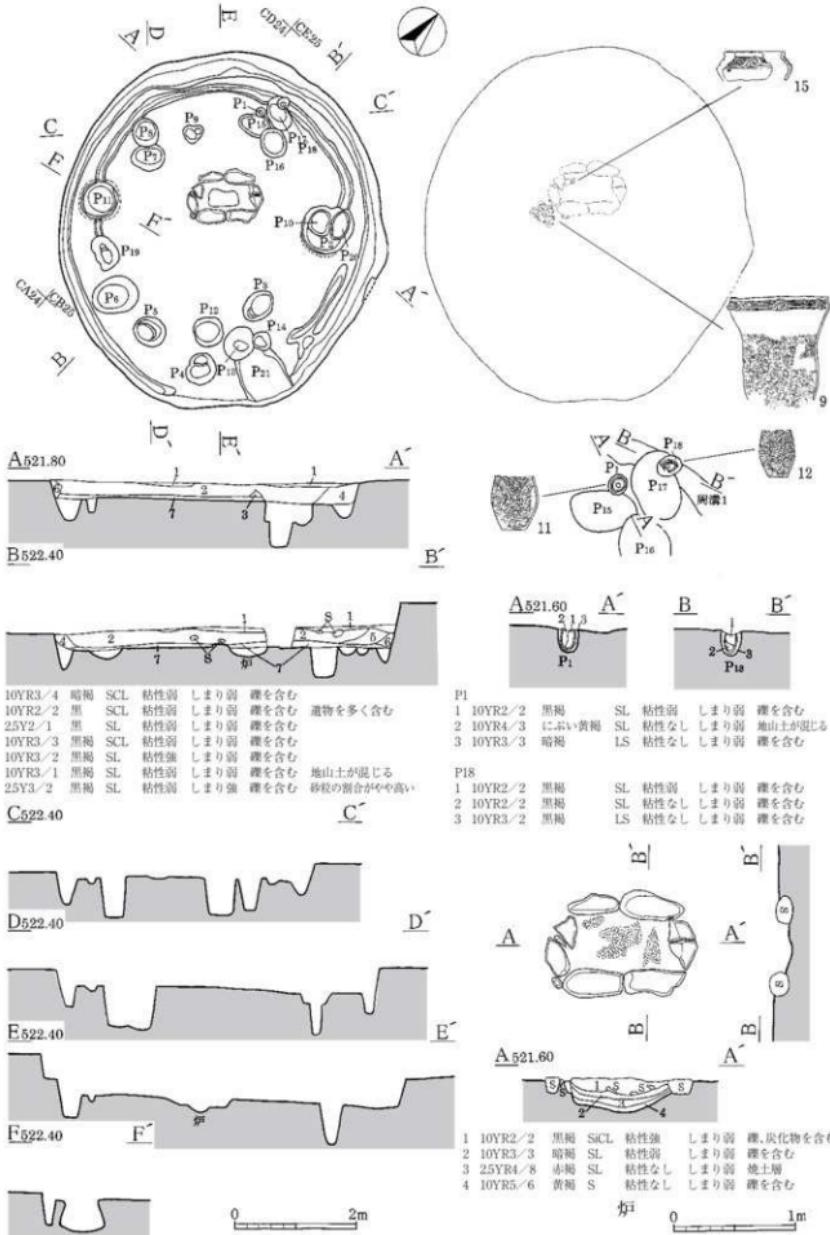
### （3）土坑

① SK003（第7図、写真図版4）

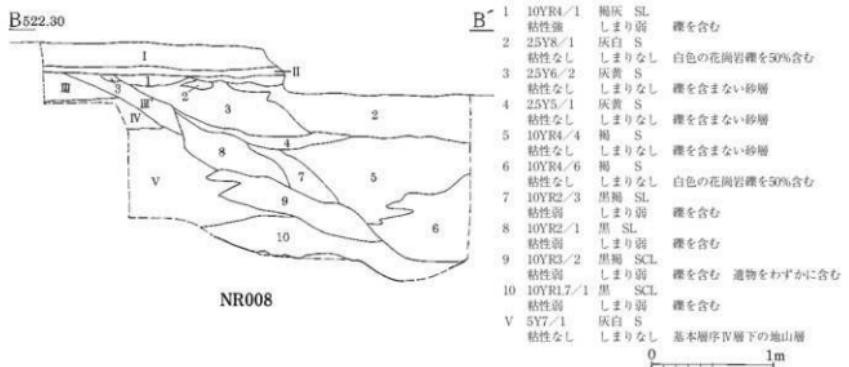
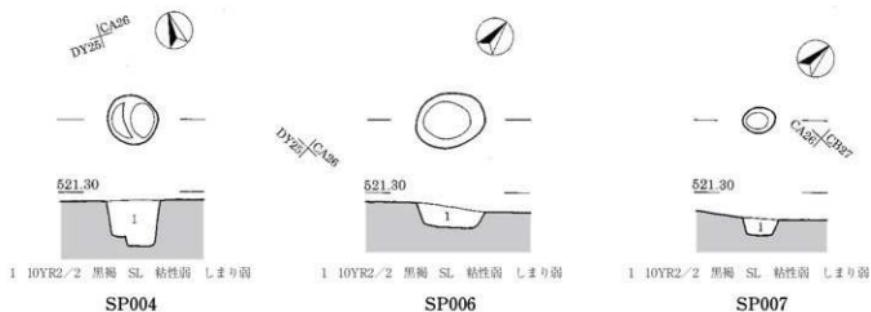
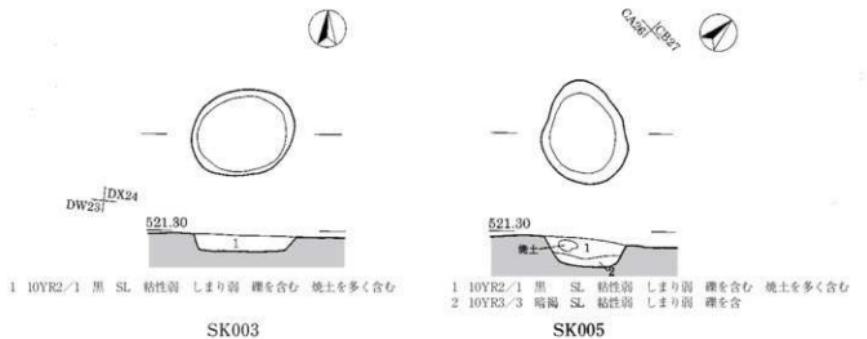
グリッドDX24に位置する梢円形の土坑。長径0.9m、短径0.7mを測る。SI001と北側の約1/3が重複するが、先後関係は不明。遺物は出土しなかった。

② SK005（第7図、写真図版4）

グリッドCA27に位置する梢円形の土坑。長径0.9m、短径0.7mを測る。NR008と重なり、遺構の上部は当該流路に削られ、底部が残存していた。覆土中に焼土を少量含む。縄文中期の土器片が少量出土。



第6図 SI002



第7図 土坑・ピット・流路

#### (4) ピット（第7図）

SI001、002周辺で3基の小規模なピットを検出した。SP004はSI001の東側、SP006、007はSI002の南東側に位置する。SP006から中期中葉の土器片（40）が出土している。

#### (5) 流路

##### NR008（第4図、第7図、写真図版4）

本調査区を北から南へ流れる大規模な流路である。トレンチ（第4図 B-B'）を設定し堆積を確認したが、予想に反して深く、安全に配慮したため最下部まで確認することができなかった。重機掘削で白色砂礫層（2層）が表土下に顯然に現れたことで検出した。その下層には黒色土層（4・7～10層）や緻密な褐色の砂土層（3・5・6層）が堆積する。確認した最下層である10層は少量の磨滅した縄文中期土器片を包含する。2層上面から10層までの深さは1.8m程度あり、最下部はさらに深いとみられる。2層上面で近代以降の陶磁器片が出土した。また、堅穴建物SI002の東壁の上部をわずかに切ることから、縄文時代以降に形成され近代までに砂礫で埋まったとみられる。幅が一定しないことから調査時に自然流路と判断したが、人工的な河川の可能性も排除できない。なお、2層のような白色砂礫層の堆積がみられる流路は当遺跡の「天伯B地点」の調査（飯田市教育委員会 1992）や上位の段丘端部に位置する北方西の原遺跡（飯田市教育委員会 2017）においても確認されているが、後者では井水とされている。

##### NR009・010

調査区南側で検出した流路である。自然流路と判断した。西から東へ流れていたとみられる。南東隅付近で擾乱に切られる。出土遺物なし。

## 第3節 遺物

#### (1) 概要

土器は縄文時代中期後葉を中心とし、中期中葉のものがわずかに含まれる。全破片を図示することは不可能であるため、本報告では遺構ごとに埋設土器、口縁部や胴部及びその他特徴的な部位を優先しつつ、土器の系統も考慮して図示した。石器は当地域において一般的な器種で構成される。石材は硬砂岩が多いが、近隣で産出しない石材もみられる。器種や石材を考慮しつつ完形に近いものを選択して図示する。

#### (2) 土器

##### SI001（第8図、写真図版5）

在地系の土器に加え、周辺地域の影響を受けたものが多く含まれる。1の胴部は二条の隆帯で縱に区画され、綾杉文を充填する。胴部上～頸部の文様帶には渦巻つなぎ弧文が配されるが、唐草文土器の特徴である胴部の隆帯渦巻文が未発達であることから、下伊那唐草文Ⅱ段階新相に属する。飯田市箕瀬跡住居址13（飯田市教育委員会 2010）で類似する埋設土器が出土している。2は在地系「下伊那Aタイプ」の「Ⅱ型式」（吉川 2003）の典型的な個体で、膨らみをもつ頸部の文様帶および胴部との境界にそれぞれ「横入組文」（末木 1978）が施され、胴部は細かいタテハケ状の条線文が地文となる。3・4は中富式系土器の口縁部。3は口縁端部に交互刺突による沈線が巡り、全体に撲糸を用いた精緻な地文

が施される点で当地では類例は少ない。5・6の胴部は縄文が主体となるため加曾利E式系土器であろう。7・8は在地系下伊那タイプの口縁部と把手。

全体として下伊那唐草文Ⅱ段階新相に位置づけられる。

#### SI002（第9～11図、写真図版6～8）

SI001と同様に、出土土器は多系統にわたるが、特に関東の加曾利E式土器をモデルにしたとみられる土器が卓越する。9・10、13～15は加曾利E式系土器の口縁から胴部付近まで残るもの。総じて頸部は無文となり、胴部は縄文が主体である。口縁端部は外反する。文様帶には隆帯渦巻文を連続させるが、13はM字を描く。15は鉢状の器種か。11・12は埋設土器で、口縁部は打ち欠かれている。縄文を胴部全体に施し、タテの沈線で区画する。22、27、34、35、36は同じく加曾利E式系土器の胴部で、地文を区画する沈線文は多様である。18～21の一群も加曾利E式系だが先の一群（9・10、13～15）よりやや小ぶりである。隆帯が波状に連続することで口縁部を区画し、区画内に沈線を充填する。また、頸部にも施文するものがあり、口縁端部は外反しない。23～25、33は諏訪～甲府盆地を中心に分布する曾利式土器の影響がみられるもの。いずれも口縁端部は折り返しにより厚く成形される。33は曾利式土器の「斜行文タイプ」にあたる。23、24は壺状の器形で、頸部付近に波状の隆帯が連続する。26は蛇行する隆帯に区画される下伊那タイプの頸部。29～32は東海地方の中富式系土器で、30にはSI001出土の3と同様に繊細な撲糸文が施される。37は中信地域の唐草文土器に特徴的な「腕骨文」の胴部破片。16・17は系統が不明のもの。16は口縁が朝顔形に開く小型の把手付土器である。17は頸部に波状の隆帯がある壺形の土器。

28、39は中期中葉の土器である。28は渦巻状の文様のある藤内式期の土器で、覆土2層の比較的上位から出土した。区画や文様を構成する隆帯の両端をキャタピラ文で加飾する。39は直線的な沈線を平行に刻む。いわゆる平出三A土器で、中期前半である。これらは遺構の年代を示すものではないが、このうち28は胴部がほぼ全周する大型の破片で、他の中期後葉の土器片と折り重なる状態で出土したことから、單なる混入とは考え難く、中期後葉に中期中葉の土器が他の遺物とほぼ同時に投棄された可能性がある。

全体として下伊那唐草文Ⅱ段階古相に位置づけられる。

#### SP006（第11図）

40は楕円区画文のある胴部の破片。時期は中期中葉の藤内式期。

### （3）石器

#### SI001（第12図石1～14、写真図版8）

打製石斧、磨製石斧、横刃形石器、礫器、敲石、石錐、石鏃、剥片が出土。石材は硬砂岩を主体とし、他に緑色岩、安山岩、ガラス質安山岩（下呂石）、黒曜石、石英玢岩がある。

#### SI002（第12図石15～23、第13図石24～42、写真図版8）

打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、横刃形石器、礫器、石錐、楔形石器、石匙、石鏃が出土。石材は硬砂岩を主体とし、緑色岩、花崗岩、ホルンフェルス、水晶、頁岩、黒曜石、ガラス質安山岩（下呂石）のほか、不明のものを含む。磨製石斧（石25）は小型で盤状を呈し、擦り切り技法の製作痕跡を残す。石材は乳白色の蛇紋岩質で、当地域では産出しないものとみられる。敲石（石28）は先端が蛤刃状に整形された痕跡があり磨製石斧の転用品と思われる。楔形石器（石38）は透明度の高い水晶で、柱面と条線が認められる。

## 第4章 総括

今次調査では縄文時代の竪穴建物2棟を中心とする集落の一端を調査し、当時の生活や文化的交流を考えるうえで良好な史料が得られた。調査成果をまとめ、地域史的な位置づけと課題について触れておきたい。

### (1) 当遺跡における集落の展開について

当遺跡は1974年に「天伯A遺跡」として当時の賀町教育委員会によって調査され、縄文時代中期後葉の集落としての実態が明らかになった（第2図A）。その際は今次調査地から数十メートル松川寄りの天伯神社周辺地点が調査地となり、竪穴建物多数ほか土坑等が数多く検出された。遺構・遺物の時期は主として中期後葉の下伊那唐草文Ⅲ段階であった。一方、同時期に150mほど南側で行われた中央道地点（旧称「山岸遺跡」「天伯B遺跡」、第2図B・C）の調査では、弥生時代から古墳時代にかかる集落が発見されたことにより、縄文時代の集落は中央道北側の天伯神社周辺に中心が想定された。その後、1992年の切石体育館地点の調査や、2009年に中央道東側を通る県道羽場大瀬木線の建設に先立ち実施された調査においても古墳時代～中世の土坑、溝址などが確認され、中央道南側に古墳時代～中世の遺構が分布する状況が明らかになった。

今次調査では下伊那唐草文Ⅱ段階を中心とする縄文集落の一端を把握した。調査範囲が狭小であったため全体像は未だ不明だが、縄文中期の集落域が天伯神社の西側にも広がることが判明したとともに、下伊那唐草文Ⅱ段階からⅢ段階にかけ集落が継続したことが明らかとなった。また、中期中葉の段階については、建物等は確認されていないものの、当期に比定される遺物が認められ、少なくともこの時期に集落が存在した蓋然性は高い。一方、本調査に先駆けて行われた試掘調査では、調査地南側の遺構分布は希薄であった。現在でも小河川が流れる低湿地帯であり、居住域からは外れるようである。

以上をまとめると、当遺跡においては縄文時代中期に中央道北側で集落が展開した後、弥生時代後期から古墳時代中期にかけて中央道付近に大集落が営まれた。それより東・南側は比較的湿潤な環境であり、生産域としての利用が想定される。当遺跡は縄文時代から続いた人々の営為を観察しうるという点で貴重であり、松川右岸を代表する集落遺跡としての歴史的価値をもつといえよう。

### (2) 竪穴建物SI002出土縄文土器について

本報告書中で、竪穴建物SI002が縄文時代中期後葉の下伊那唐草文Ⅱ段階古相、SI001が同Ⅱ段階新相と位置付けた。今次調査において特筆すべきは竪穴建物SI002出土の加曾利E式系土器である。当該系統土器は下伊那唐草文Ⅱ段階に出現し、以後当地域における主要なタイプのひとつとして展開するが、SI002で確認されたものは10数個体以上にのぼる。その内実をみると、口縁部に隆帶渦巻文等を施す一群（9・10、13～15）と、口縁部に隆帶つなぎ弧文を連続させる一群（18～21）がある。前者は吉川金利が「加曾利E式系aタイプ」（吉川2005）としたもの。頸部無文で胴部地文に縄文を配すなど、加曾利E 2式の特徴を比較的忠実に表現する。一方、後者は吉川による「加曾利E式系bタイプ」で、渦巻などの隆帶弧文を突出させながら立体的に連続させるもの（18）と、突出させないもの（19～21）がある。

また、SI002からは諏訪・甲府盆地を中心とする曾利式土器の影響を受けたと考えられる土器が比較的

多く出土した点も注目される。「斜行文タイプ」の口縁（33）、口縁部から頸部にかけて無文のもの（25）が当該型式の特徴をよく示す。また、17、23、24については、壺状の器形や頸部に波状の隆帯を連続させるモチーフなどにもその影響を見て取ることができよう。

以上のように加曾利E式系や曾利式系が多く含まれるSI002の土器は、飯田市上郷地区の平畠遺跡1号住居址（上郷町教育委員会 1988）と類似する。ただし、伊那谷南部の曾利式（系）土器については中期後葉の各段階で散発的にみられる程度であり、その影響は限定的とみられている（吉川 2019）。このような現状からみても、当建物出土土器は中期後葉の実質的な開始時期とされる下伊那唐草文Ⅱ段階の評価を進めるうえで示唆に富む資料といえる。

### （3）まとめと課題

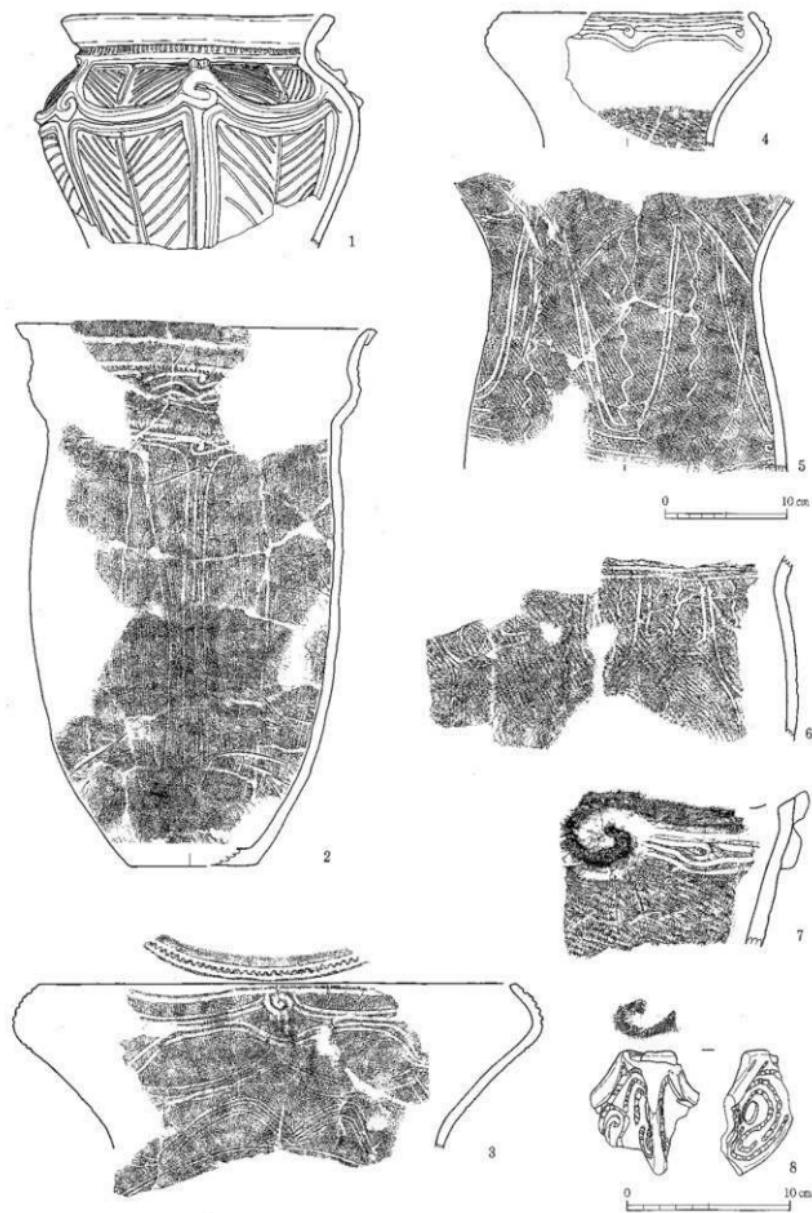
今次調査では、当遺跡のなかでも山麓に近い中央道北側の土地利用の一端が判明した。堅穴建物は2棟とも縄文時代中期後葉に位置づけられ、今次調査区は当該期の集落域内とみられる。出土した縄文土器からは、在地系の土器だけでなく、関東地方、東海地方、諏訪・甲府盆地といった各地域の影響がみられる。このように周辺地域の土器を積極的に取り込む点は「文化の回廊」とも称される当地域を端的に表す現象ともいえるが、それらの伝搬経路や相互の影響関係などについては、地域的課題として残されている。

いずれにせよ、狭い範囲の調査にも関わらず、松川流域における縄文時代の主要な集落跡として、改めて当遺跡の歴史的価値が明らかとなったことは大きな成果といえよう。

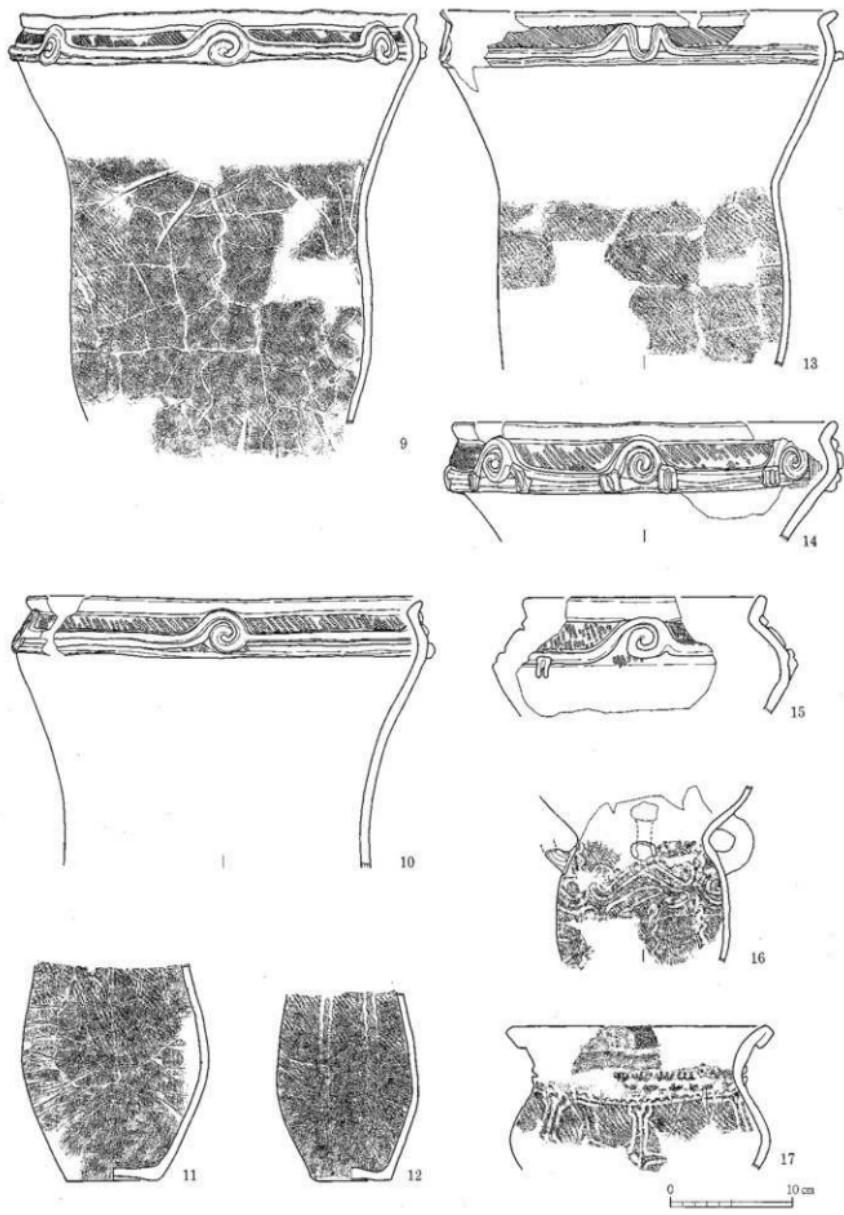
最後になりましたが、調査にあたり多大なるご理解とご協力をいただいた藤井興業株式会社様、並びに調査や整理作業の実施にあたって多大なるご理解・ご協力をいただきました皆様方に深く感謝申し上げます。

#### 引用・参考文献

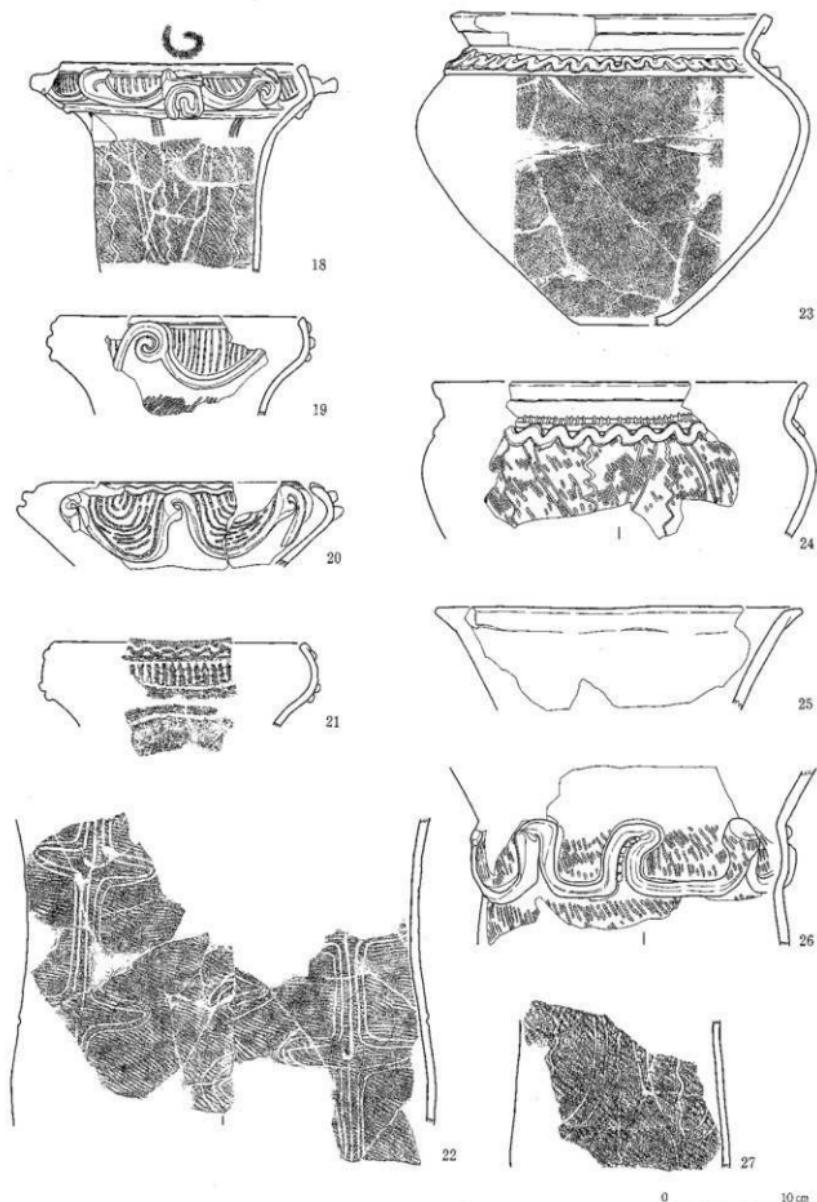
- 飯田市教育委員会 1992 「天伯B遺跡（五輪原地籍）—飯田市切石地区社会体育館建設に伴なう埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書一」
- 飯田市教育委員会 2009 「切石遺跡群」
- 飯田市教育委員会 2010 「箕瀬遺跡」
- 飯田市教育委員会 2017 「北方西の原遺跡」
- 賀茂町教育委員会 1984 「賀茂一色・天伯B遺跡発掘調査報告書」
- 上郷町教育委員会 1988 「平畠遺跡・八幡原遺跡 一農村基盤総合整備事業上黒田東部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」
- 長野県教育委員会 1971 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一飯田地区—昭和45年度」
- 長野県教育委員会 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一下伊那郡賀茂町 その2・天伯A—昭和49年度」
- 櫛原功一 2008 「曾利式土器」『総覧 繩文土器』、(株)アム・プロモーション
- 坂井勇雄 2013 「下伊那地方における縄文時代中期土器の様相」『文化の十字路 信州』(日本考古学協会2013年度長野大会 研究発表資料集)
- 末木健 1978 「伊那谷中部縄文中期後半の土器群とその性格」『信濃』30-4
- 吉川金利 2003 「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102
- 吉川金利 2005 「平成17年度秋季展示 下伊那唐草文土器～縄文中期後葉伊那谷南部の地域性～」飯田市上郷考古博物館
- 吉川金利 2008 「唐草文系土器」『総覧 繩文土器』(株)アム・プロモーション
- 吉川金利 2019 「下伊那唐草文土器圏内に於ける曾利系土器の様相」『伊那』第67巻第6号



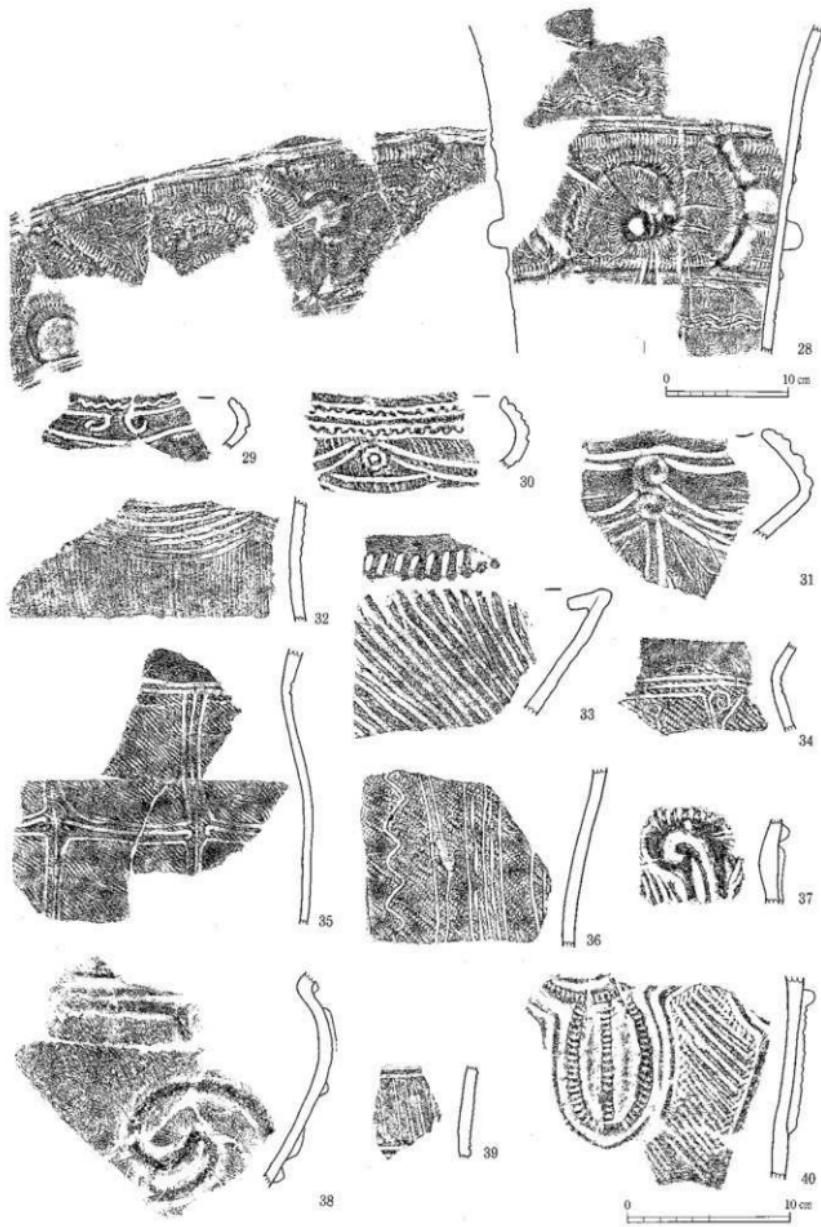
第8図 SI001出土土器 (1~5 : S=1/3 6~8 : S=1/4)



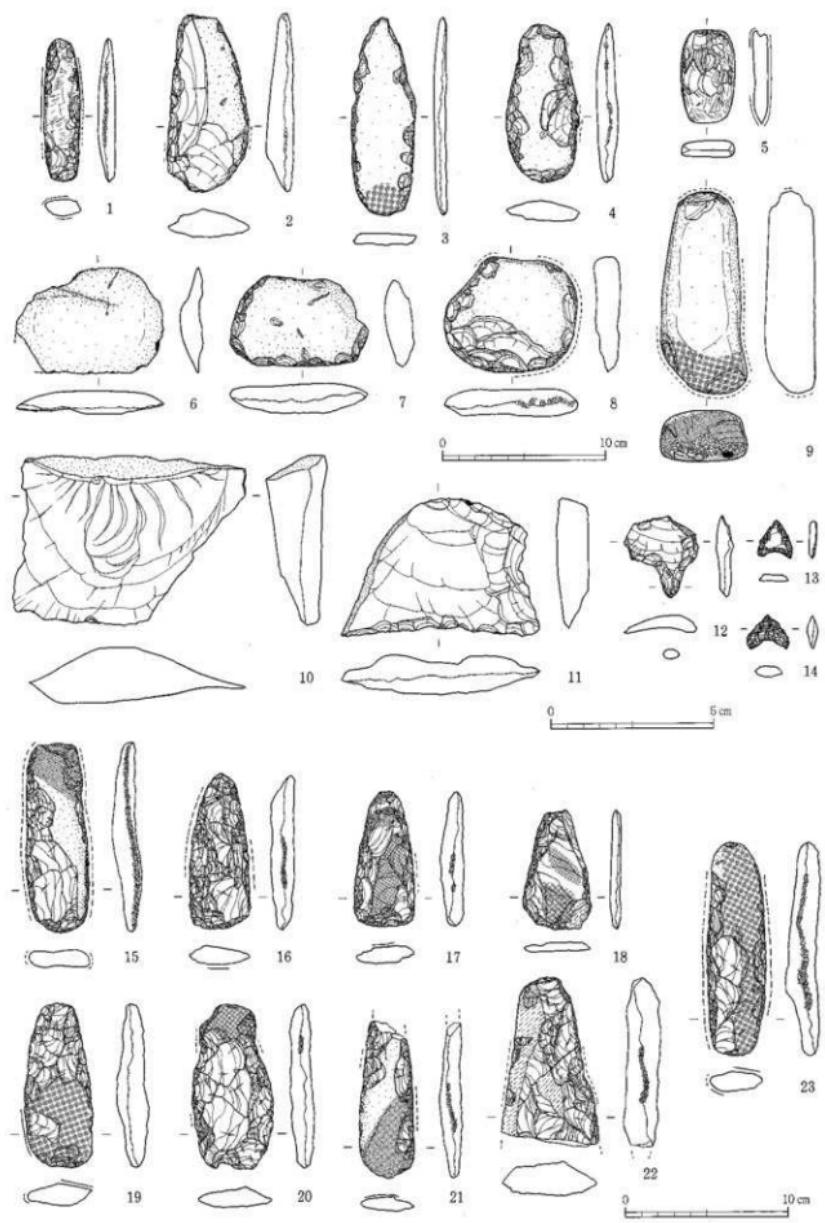
第9図 SI002出土土器 1 (S=1/4)



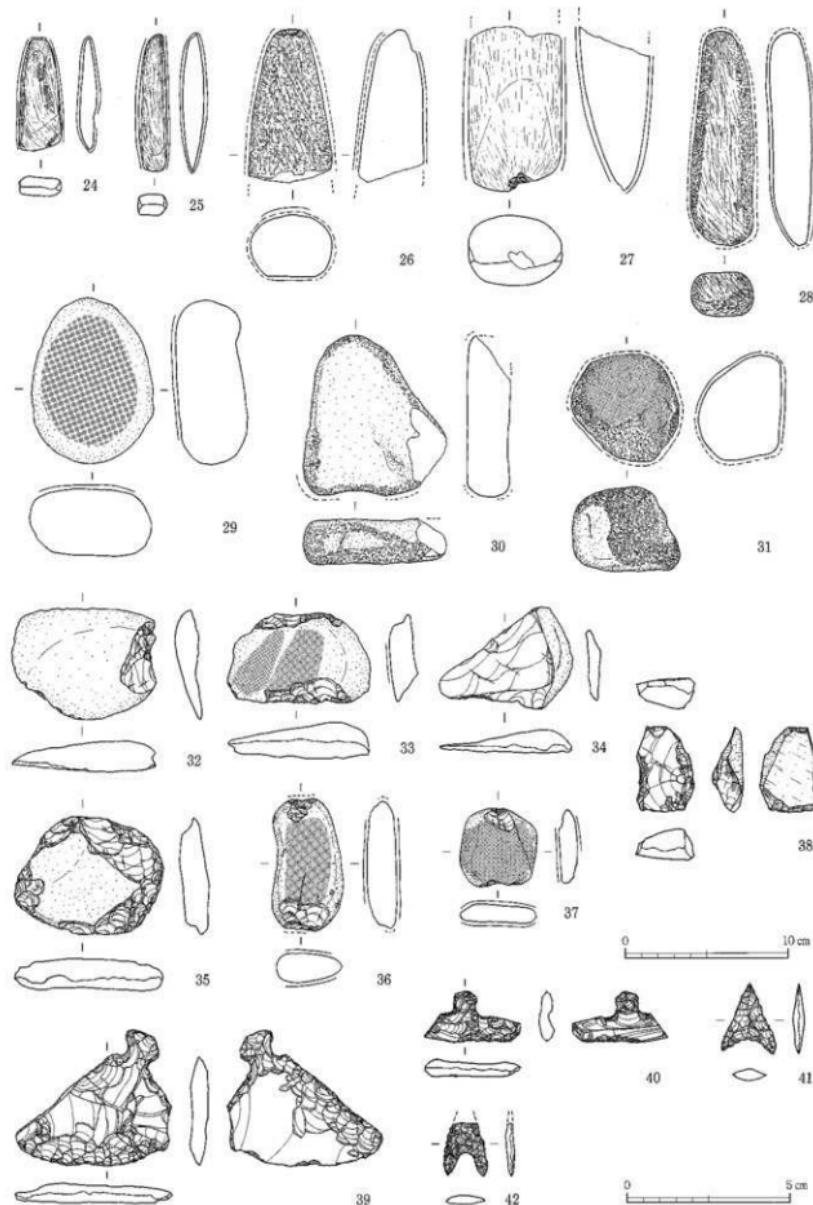
第10図 SI002出土土器 2 (S=1/4)



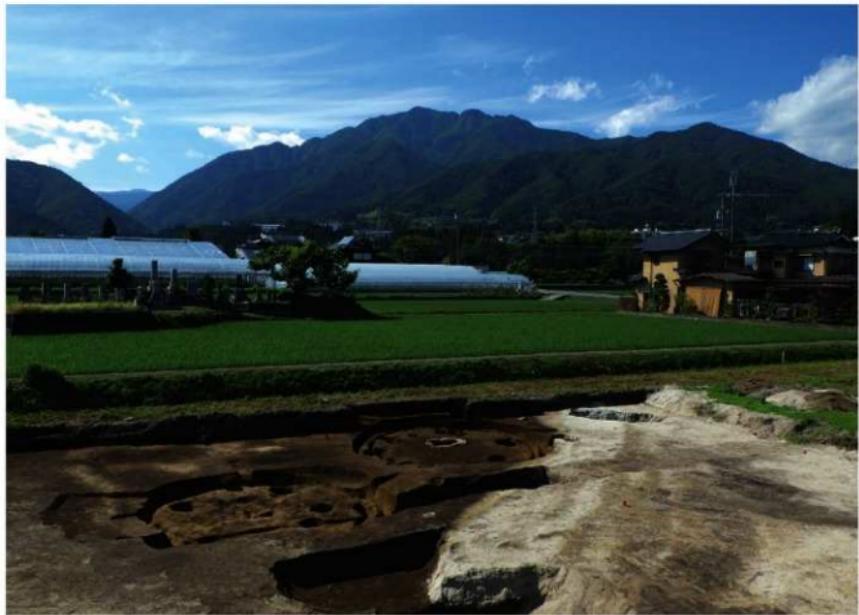
第11図 SI002出土土器 3 (28:S=1/4 29~39:S=1/3)・SP006出土土器 (40:S=1/3)



第12図 SI001出土石器 (1~10 : S=1 / 4 11~14 : S=1 / 3) · SI002出土石器 1 (S=1 / 4)



第13図 SI002出土石器 2 (24~38 : S=1/4 39~42 : S=1/3)



調査区全景（南東から）



調査区全景（北から）



S1001全景



炉



炉 芯部付近



周溝・柱穴



遺物出土状況



S1002全景



石圓炉



周溝・柱穴



P1 埋設土器



P18 埋設土器



NR008断面



SK005



SP006



作業風景



調査地現状



SI001 出土土器



S1002 出土土器（1）



SI002 出土土器 (2)



SI002 出土土器 (3)



SI001 出土石器



SI002 出土石器

## 報告書抄録

ふりがな	きりいしいせき					
書名	切石遺跡					
副書名						
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月日	令和2年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
きりいしいせき 切石遺跡	いいだ し かなえきりいし 飯田市 豊 切石 4972番	20205 4972番	35° 30' 152	137° 47' 50"	2018/05/28 ~ 2018/06/28	309m <sup>2</sup> 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
切石遺跡	集落	縄文時代	竪穴建物2、土坑2、 ピット3	縄文土器、石器	流路	
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代の竪穴建物、土坑、ピット、時期不明の流路を調査</li> <li>・竪穴建物は縄文時代中期後葉に比定。石円炉、周溝等を有する。うち1棟からは2基の埋設土器が出土。覆土中から縄文土器、石器が出土。</li> <li>・当地における土地利用の変遷と他地域との文化交流を考えるうえで貴重な成果が得られた。</li> </ul>					

## 切 石 遺 跡

発 行 日 2020年3月

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

飯田市教育委員会

印刷・製本 有限会社飯田写真印刷